

中山間地域における地域資源を活用した肉用牛振興と地域活性化 - 地域肉用牛振興会を核とした元気のある地域振興 -



大分県豊後大野市
温見地域畜産振興会
(代表：小野 英一)

1 地域の概況

(1) 一般概況

温見地域畜産振興会（以下、「振興会」という。）は、大分県の西南部、平成 17 年 3 月 31 日に旧大野郡の 7 町村（三重町、清川村、緒方町、朝地町、大野町、千歳村、犬飼町）が合併して誕生した豊後大野市にある。

温見地域のある旧朝地町は、総面積 68.39km²、耕地面積 898ha、総人口 3,522 人、世帯数 1,250 戸である。温見地域は旧朝地町の北側に位置する標高 500m から 600m の山地丘陵地帯である。気候条件は、比較的温暖な南海型気候区に属しているが、中山間地であるため 1 月平均気温 3.5 、8 月平均気温 24.5 と寒暖の差は激しい。年間降水量は 1,733 mm で、特に梅雨時期と 8～9 月の台風シーズンに雨量が集中している。阿蘇火山灰土系で褐色または黒色火山灰土であり、水利は高地であるため非常に悪い。

交通は、町内には国道 57 号を主幹に、県道大分竹田線が中心部から当地域の中心を抜けて大分市



図 1 豊後大野市及び旧朝地町の位置

へ、県道朝地線が中心部から直入町に通じ、それらが定期バスの路線となっている。また、JR 豊肥線の朝地駅があり、大分市へは約 1 時間である。

(2) 地域の農業・畜産の概況

旧朝地町の産業別就労状況は総数 1,858 人のうち第 1 次産業 705 人、第 2 次産業 378 人、第 3 次産業 774 人と第 1 次産業が 38%を占めている。

総農家戸数は 595 戸で販売農家は 460 戸、自給的農家は 135 戸であり、農業の就業人口は 708 人で基幹的農業従事者数は 589 人で 65 歳以上は 67.5%と高齢化が多い地域である。

農業産出額は 13 億円で、うち耕種は 7 億 2 千万円、畜産は 5 億 7 千万円である。肉用牛は 3 億 9 千万円で 30%を占め、米に続き第 2 位である。また、林産物であるシイタケの産出額は 2 億 5 千万円（推定）である。

(3) 温見地域の概要

温見地域は、梨原（なしはる）、志屋（しや）、温見（ぬくみ）、小川野（おがわの）、鳥屋（とや）の 5 集落からなり、総戸数 144 戸のうち農家数 81 戸、農業就業人口は 148 名であり、専業農家は 29 戸、認定農業者数は 26 人となっている。

肉用牛飼養農家は 26 戸で 875 頭が飼養されており、豊後大野市および旧朝地町で主要な産地である。

表 1 温見地域における肉用牛飼養の概況

	飼養戸数 (戸)	肉用牛飼養頭数 (頭)	子牛セリ頭数(頭) 【豊後豊肥市場出荷分】
豊後大野市	454	5,370	2,121
旧朝地町	92	不明	663
温見地域	26	875	402

2 活動の目的と背景

(1) 設立以前の地域の状況

温見地域は、標高 500 を超える準高冷地に位置し、広大な山林原野を有し平坦地の少ない典型的な中山間地域である。現在の耕地面積は田 52ha、畑 60ha、樹園地 5ha であるが、戦後間もない昭和 20 年ごろは水田、畑は山林原野の谷間や交錯する中間値に点在し、狭い棚田となっているため、労働生産性は極めて低い状況であった。このため、当時の営農は、米、実取りトウモロコシを中心に、木炭生産と繁殖和牛 1~2 頭を組み合わせたものであった。加えて、収穫を目前にしながら、イノシシやカラスといった鳥獣被害を受けることもしばしばで、労働の割に生産性が上がらず、非常に貧しい生活を余儀なくされていた。

このような状況を打開するべく、当時の地域代表であった大野郡畜産農業協同組合の理事が、地域内の各集落の代表者に呼びかけ、農業研究グループ（以下、「農研グループ」という。）を作った。

時期を同じくして、昭和 30 年 1 月 1 日に町村合併により旧朝地町が誕生し、町の産業として農業振興を掲げ、とくに肉用牛とシイタケ栽培を重点的に取り上げた。具体的な方策としては地域の立地条件を生かした放牧による肉用牛の多頭化と、自然条件を生かした椎茸栽培で経営改善、所得の向上を図ることであった。

(2) 温見地域畜産振興会の設立

このような旧町等の動きもあり、農研グループを呼びかけた理事が畜産グループ結成を働きかけ、地域住民の多くの協力を得て「温見地域畜産振興会」が設立された。現在、同地域の肉用牛農家 26 戸のうち 24 戸が会員である。

表 1 温見地域畜産振興会の概要

・設	立：昭和 30 年 8 月 1 日
・構	成：朝地町の梨原、志屋、温見、小川野、烏屋の 5 集落に係る肉用牛農家、 現在 24 名
・役	員：会長、副会長、会計、監事 1 名、顧問 2 名、支部長 3 名
・年	間予算：45 万円
・目	的：地域の畜産振興をはかり、もって農業経営の安定向上に資すること
・活	動項目： 会員の畜産経営の向上に関すること 会員の飼養管理技術向上に関すること 会員の研修及び親睦を図るため必要なこと。 関係機関との連絡協調。 その他必要と認める事項

表2 温見地域畜産振興会員における肉用牛としいたけ複合経営の形態別農家数

年齢	20～	30～	40～	50～	60～	70～	計
肉用牛専業			3	3	1	2	9
複合（肉用牛主体）			3	6	2		11
複合（しいたけ主体）	1		1	2			4
計	1	0	7	11	3	2	24

表3 温見地域畜産振興会員における繁殖雌牛飼養頭数規模の経営形態別農家数

繁殖雌牛 飼養規模	1～4	5～9	10～ 19	20～ 29	30～ 39	40～ 49	50～ 59	60～	計
肉用牛専業	2	1	1			2	1	2	9
複合（肉用牛主体）	1	3	1	5	1				11
複合（しいたけ主体）	2	1	1						4
計	5	5	3	5	1	2	1	2	24

振興会では肉用牛繁殖としいたけの複合経営が、原木材の下草利用という点で共存が成立し、集団の和の力で独自の複合経営を確立し、地域営農基盤の基本となっている。この営農形態は後継者の世代に変わった現在も引き継がれ、会員の共存意識、互助精神に支えられた協調性の強い集団と成長している。現在の会員は設立時の振興会会員の後継者 24 名であるが、各会員が地域活性化の核となっている。活性化の活動は、振興会の目的である肉用牛の飼養管理技術や経営の向上、相互扶助といった家業の振興活動のみならず、青年部のメンバーは郷土文化の神楽の保存や産地直売所の経営運営にも取り組んでおり、温見地域の振興・活性化の中核的存在となっている。

3 地域畜産振興活動の内容

1) 地域畜産振興につながる活動・取り組みの具体的な内容

(1) 増頭への取り組み

昭和 36 年ごろ、農業近代化資金制度ができ有利な資金が得られるようになったことから、振興会会員で集団による子牛の導入を開始した。昭和 39 年には肉用牛増殖基地育成事業の指定を受け、牛衝場と枠場を設置し、県有牛 40 頭も借り受けて一挙に増殖を行った。これを契機に肉用牛集約生産基地育成事業による畜舎、付帯施設の設置や肉用牛等導入事業、県の自家育成保留事業にも積極的に取り組み、徐々に規模拡大を行っている。

現在、振興会では当面の目標を繁殖雌牛 500 頭（1 戸当たり 20 頭）と掲げ所得向上を目標とした規模拡大運動を実施しており、これまで以上の肉用牛生産団地となることを目指している。

現状は 1 戸当たり 19 頭であり、目標達成に近づいている。大規模農家については豊後大野市の繁殖雌牛 50 頭以上規模農家 8 戸のうち 3 戸が温見地域にあり、うち 1 戸（繁殖雌牛 75 頭規模）が平成 17 年度大分県農業賞企業的農家の部で最優秀賞（県知事賞）を受賞している。

表 4 朝地町温見地域における肉用子牛出荷状況の推移

(単位：頭、千円)

	温見地域			朝地町			朝地町出荷 頭数に占め る割合
	出荷頭数	出荷金額	1 頭あたり の平均価格	出荷頭数	出荷金額	1 頭あたり の平均価格	
H7	271	106,438	393	673	260,486	387	40.3%
H12	370	127,165	344	685	239,550	350	54.0%
H17	402	168,622	419	663	275,924	416	60.6%

(2) 林間放牧の取り組み

取り組みの経過

昭和 30 年代前半から地域に広がる森林資源であり、もう一つの基幹産業であるシイタケの原木となるクヌギ林へ放牧するようになった。このため、放牧場の条件整備が急務となり、昭和 40 年に小規模草地改良事業で 10ha の草地改良を行い、昭和 42 年から 44 年にかけては草資源維持管理事業や農業構造改善事業により草地改良、牧

柵と給水施設等を設置し放牧飼養体系を整えるなど共同利用牧野の開発を行った。

林間放牧の方式は夏山冬里とし、飼養管理の重点を牛の健康と受胎率の向上に置いた。林間放牧は当時からすれば非常に活気的なことであったが、放牧に不慣れの牛が多かったため、放牧特有のピロプラズマ病（ダニ熱）で死亡する牛が続出し、結果は散々なものであった。これを機に牛飼いを廃業する農家もあり、事後処理に奔走しながらも改善策を研究し、草地改良とダニ駆除、さらに免疫のない牛には予防注射をするなどを実行し、解決していった。

その後は重大な事故もなく飼養頭数も順調に伸びていったが、子牛の過放牧による市場価格の低下がみられたことから、昭和 45 年ごろからは牧場または飼料ほに接した場所に多頭省力牛舎を導入し、子牛は畜舎での飼養とし、親牛のみを里山に放牧、夜は授乳させるシステムを採用した。これにより子牛の発育不良は無くなり、市場価格も上昇した。この背景には、畜舎に隣接した山林に放牧することが最も効率的であるという会員の一致した見解があり、山地の交換分合が積極的に推進された。

また、昭和 50 年代から増頭・規模拡大することに伴い、放牧場の拡大、整備が急務となり、共同牧野の整備と併せて、会員各々の個人牧野の開発も行われ他結果、地域全体を取り囲んだ牧野形成がなされている。

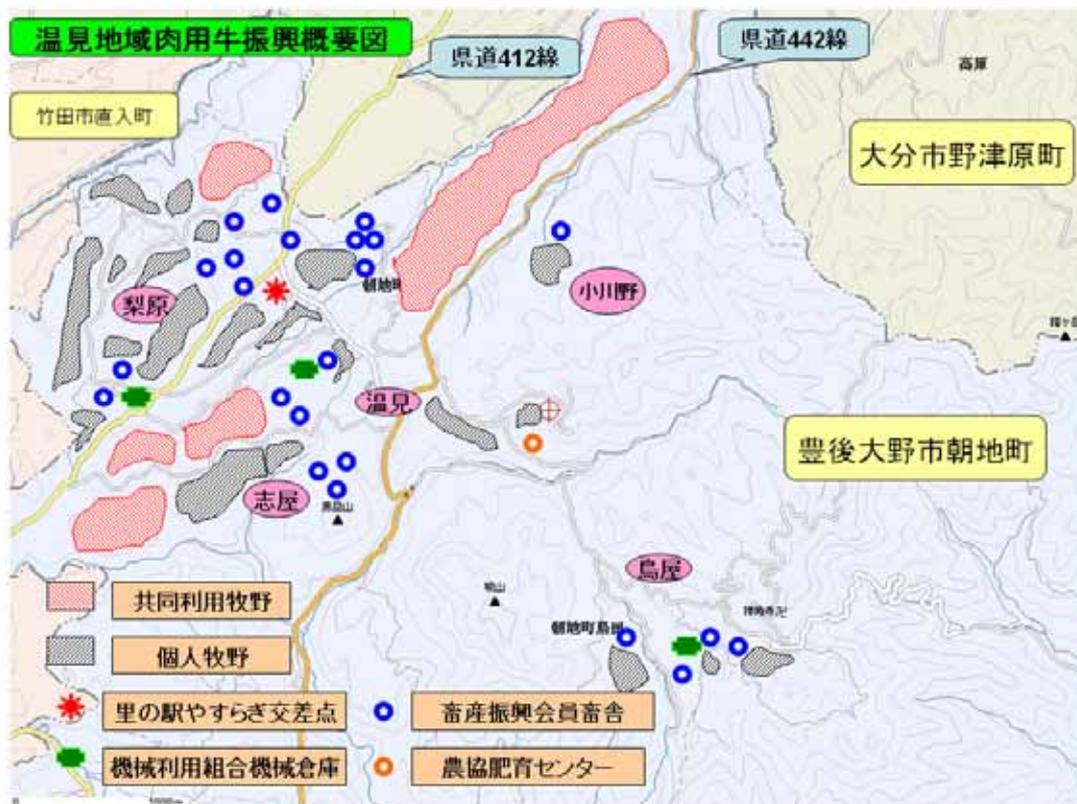


図2 温見地域における牧野と会員畜舎の分布等

共同牧野の状況

現在、5つあわせて約170haの共同牧野があり、会員15名が利用している。入牧期間は5月上旬～12月下旬である。

表5 共同利用牧野の概要

牧野名	明ヶ谷牧野	ハシノメ牧野	朴刈牧野	三成牧野	小無田牧野	個人牧野
面積	約30ha	約10ha	約10ha	約100ha	約20ha	約132.5ha
入牧者	4名	4名	4名	8名	3名	20名
入牧時期	5月3日前後	5月3日前後	5月3日前後	5月10日前後	5月上旬～	5月
下牧時期	12月下旬	12月下旬	12月下旬	12月下旬	11月中旬	12月(周年放牧)
入牧料	20円/日・頭	20円/日・頭	20円/日・頭	5頭まで1万円、以降5頭毎に1万円の追加	特になし。牧柵修繕に見合い	社も有り)
常時放牧頭数	295頭(放牧率60%)					
飼養管理	<p>入牧は妊娠鑑定終了後に行い、分娩予定日の2週間～1ヶ月前に下牧する。パイチコールを1ヶ月おきにブアオン法により行う。鉾塩は常備設置する。</p> <p>濃厚飼料の給与については、牛の飼養者により異なるが、毎日もしくは3日に1回程度。</p>					<p>基本的には共同牧野と変わらないが、個々により異なる。</p>
	濃厚飼料の給与は1週間～10日に1回の程度	濃厚飼料の給与は1週間～3日に1回の程度	濃厚飼料の給与は1週間～10日に1回の程度	濃厚飼料の給与は1週間～3日に1回の程度		
事故(死亡)頭数(H17実績)	0頭	0頭	0頭	1頭	0頭	-

管理については、入牧前に入牧者全員による牧柵の定期的な点検・管理と入牧・下牧時の牛の追い込みである。牧柵の点検については、非常に広範囲にわたる面積であるため労力を要するが、脱牧による牛の事故を防ぐために組合員の協力の基、相互扶助の精神で行っている。

給水施設については湧水や雨水を活用できるため、とくに湯水による事故は起こっていない。

なお、修繕費・鉾塩等に係る経費は地区(牧野)ごとに決算することとしており、

志屋地区(明ヶ谷牧野、ハシノツメ牧野、オトマリ牧野)では1頭1日あたり20円、梨原地区(三成牧野)では入牧頭数5頭まで1万円/年、5頭増えるごとに1万円加算する方式としている。

個人牧野の状況

個人が所有する牧野については、会員の24名のうち、20名が所有し、全体の面積は132.5haにもものぼる。入牧期間は共同牧野と同様で5月上旬～12月下旬であるが、中には周年放牧を行っている農家もある。

放牧の成果・メリット

現在の温見地域の繁殖雌牛492頭に対し、共同牧野と個人牧野をあわせ295頭が常時放牧されており、放牧牛の割合は約6割になる。まさに、林間放牧が主体の肉用牛経営となっている。

このように地域資源を有効活用し取り込まれる林間放牧は、肉用牛繁殖、シイタケ栽培の双方に以下のようなメリットを生じている。

<肉用牛飼養上の利点>

- a.放牧における労力の低減、飼料費の節減
- b.適度に日陰があり草が柔らかい
- c.適度に運動するため健康良好な牛となり、受胎率が向上し生産性が上がる

<椎茸栽培からの利点>

- a.原木林の下草刈りを牛の舌刈りで行うため、労力の節減が大きい
- b.原木林が常に清掃された状態にあるため、原木に害虫の発生寄生がなく、欠株を生せず生産性が高い
- c.牛ふんが資源循環することから原木林の発育が良く、伐採回帰が短縮

(3) 自給飼料確保への取り組み

振興会の最初の活動は、肉用牛多頭化に併せ、実取りトウモロコシから青刈りトウモロコシへの作物変更と、空き地に牧草を植えるよう取り組んだことである。肉用牛の主産地を目指す会員たちは借金を重ねながら、子牛を導入して増頭してきたが、子牛の生産性向上のためには栄養価の高い粗飼料を確保することが課題であり、放牧体系と併せて効率的な飼料作付体系に取り組む必要があった。このため、地域にある酪農家から先進的な自給飼料生産を学習し、効率的かつ低コスト生産を行うための方法について検討を重ねてきた。

その結果、地区ごとに自給飼料生産のための機械共同利用組合を設立し、国庫事業や県事業により飼料生産機械を導入し、一体的な生産のできる体制を整えるとの結論

に至り、実行した。

飼料体系は主として夏はトウモロコシ、ソルゴー、スーダン、冬はイタリアンライグラスの作付けである。収穫作業はイタリアンライグラスではロールベール体系で共同作業を行っている。刈り取り、乾燥調製、集草、ロール、運搬と一連の作業を連携プレーによって行うため、非常に効率よい作業体系がとられている。

表6 温見地域における機械共同利用組合の概要

	志屋機械共同利用組合	梨原機械共同利用組合
構 成 人 数	5 名	10 名
共同利用する機械の種類	トラクター 3台 (80ps×2:34ps×1) ロールベール 1台 ラッピングマシン 1台 EP 1台 ワゴン 1台 ジェットシーダー 1台 コンバクター 2台 ブロードキャスター 1台 ライムソア 1台 マニアスプレッター 1台	トラクター 2台 (80ps×1:82ps×1) ロールベール 2台 ラッピングマシン 2台 EP 2台 ワゴン 2台 スプレアー 1台 コンバクター 2台 ブロードキャスター 2台 マニアスプレッター 2台 スーパーカー (自走式コン等収穫機械) 2台
共同作業内容	集草作業、ロール、ラッピング、運搬、サイレージ生産	集草作業、ロール、ラッピング、運搬、サイレージ生産
作 目	夏：トウモロコシ、ソルゴー、スーダン 冬：イタリアンライグラス	夏：トウモロコシ、ソルゴー、スーダン 冬：イタリアンライグラス
面 積	15.5ha	16.0ha
使 用 料 金	・ラッピングロール1個につき、ヒモ、ラップ代として1,000円の徴収 ・トラクター1時間あたり1,500円の徴収	・ラッピングロール1個につき、ヒモ、ラップ代として1,500円の徴収 ・稲ワラの場合、ロールのみ500円、ラッピング有り1,000円 ・トラクター1時間あたり1,500円の徴収

(4) 家畜飼養管理技術の統一、向上

年間管理及び日常管理等については、県で統一している繁殖牛・子牛飼養管理マニュアルに順じて管理を行い、産地の銘柄化や出荷子牛の斉一性について取り組んでいる。

特に青年部を中心とした若手農家は、県の補助事業を上手く活用しながら月に1回

程度、研修会・検討会を行っていたこともあり、育成技術や効率的生産の高い飼養管理技術を会得し、近隣農家の目標となっている。また、女性部では家畜市場開催後に反省会を実施しており、日々の子牛管理の研鑽に努めている。

最近では、若手農家が多頭化と省力化、効率性を重視したフリーバーン畜舎に移行しているため、群管理への移行や哺乳ロボットを導入する農家もあり、その情報交換も多い。

(5) 積極的な育種改良事業への取り組み

血統的に統一された優秀牛を生産するため、昭和42年から育種改良事業に取り組んでいる。種雄牛の計画交配を始め、産子の検査、優秀子牛の地域内保留に努めている。

このため、品評会は熱心に行われており、各集落毎による品評会とその上位品評会として温見地域品評会が行われ、勝ち残った種牛のみが朝地町品評会に出品できることとしており、市、県への出品は非常に長い道のりとなっている。

表7 温見地域畜産振興協議会員から大分県畜産共進会出品実績

年 度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
出品頭数	5頭	4頭	3頭	3頭	4頭 うち3頭はセツ群
備 考	最優秀賞3頭	最優秀賞2頭 農林水産大臣 賞1頭		最優秀賞1頭	

また、受精卵移植による優良繁殖雌牛確保にも取り組んでいる。大分で一世風靡した種雄牛「糸福」の種が平成7年頃から入手困難となったことがきっかけである。現在まで153個の採卵数があり、移植頭数は59頭で、18頭が受胎している。

表8 受精卵移植実績(平成7年～平成17年)

項 目	ドナー牛頭数	採卵数(凍結)	移植頭数	受胎頭数	自家保留
成 績	8頭	153個	59頭	18頭	9頭

(6) ヘルパー活動による相互扶助活動

温見地域の肉用牛農家の平均年齢は平成 2 年の 46.2 歳から平成 18 年は 55 歳となっており、高齢化の波は確実に押し寄せている。このため、削蹄、除角の重労働作業については、個々の農家で行うことが出来なくなっている。

そのため、温見地域畜産振興会の若手メンバーが中心となり、平成 8 年に朝地町全体をカバーできる朝地町ヘルパー組合を設立した。組合員は相互扶助精神を発揮して、市場出荷準備として出荷子牛の削蹄作業、毛刈り作業、市場運送、市場引き出し、品評会準備の削蹄、繁殖雌牛の削蹄を実施している。

表 9 平成 17 年度ヘルパー活動の実績

(単位 : 頭)

登録運送	削蹄	除角	市場運送	市場引き出し
5	373	31	144	13

(7) たい肥処理

地域内で生産されたたい肥は全て自給飼料生産や特別栽培米生産のための堆肥として活用されている。たい肥生産は耕種農家に喜ばれるものにするため、切り返しを行いながら 6 ヶ月間の発酵を行い、散布作業は共同利用機械組合の機械を活用している。

特に顕著な取り組みとしては、温見地域に隣接する綿田集落の特別栽培米「綿田米(わただ米 : 竹田・岡藩の御膳米として重用された歴史を持つ)」の有機たい肥としての供給や、隣町の野津原町の集落営農組合への供給、ワラとの交換を行っている

4 活動の年次別推移

年次	活動の内容等	成果	課題・問題点等
昭和 20 年代	米、実とりトウモロコシを中心とした木炭生産、繁殖和牛経営（1～2頭）の営農経営		労働生産性は極めて低く、営農だけでは生活出来ない。
昭和 30 年代前半	農業研究グループを結成。その後、地域の立地条件を活かした放牧による肉用牛の多頭化と椎茸栽培による経営改善を推進。 畜産においては昭和 30 年 8 月に「温見地域畜産振興会」が結成された。 林間放牧を行うのに便利のように山地の交換分合を計画し、畜舎の地続きで放牧できるようにした。	肉用牛の技術研修会等が開始された。 これを契機に里山利用が広がり、里山に牧柵を作るようになった。	
昭和 30 年代後半	近代化資金が創設されたことから、子牛を導入し、徐々に多頭化経営へ移行。また、椎茸経営との複合経営が主流となっていく。 草地改良とダニ駆除、免疫注射を行った。	クヌギ林への放牧が積極的に行われた。 ピロプラズマ病による牛の死亡が激減した。	放牧によりピロプラズマ病が発生し、死亡する牛が続出
昭和 40 年代	草地改良事業に取り組み、草地改良、牧柵設置、給水施設等放牧体系を整えた。 鳥取や但馬の血統を導入し育種改良事業に取り組み。	牧野組合が地区ごと設立され、共同で放牧された。 より一層の多頭化経営に取り組めるようになり、併せて多頭化畜舎への建築に取り組む。 椎茸の原木林の下草利用による肉用牛繁殖経営と椎茸経営の複合経営が確立。 朝地町内での畜産品評会では常にトップを独占するようになる。	子牛の過放牧により市場価格が低迷。

昭和 50 年代	さらに多頭化に対応するため、草地開発、草地改良に取り組む。 また、昭和 59 年には放牧だけでは不足する粗飼料を確保するため、自給飼料生産機械を導入し、効率的な飼料生産に取り組む。 肉用牛等導入事業を積極的に取り組み、更なる改良に取り組む。	低コスト生産を行うため、共同利用機械組合が設立された。 育種改良が格段に進められ、昭和 55 年の県共進会には 11 頭を出品。農林水産大臣賞を受賞。 S55 朝日農業賞受賞	
昭和 60 年代 移行	県が進める増頭運動に賛同し県単独事業による低コスト畜舎が導入される。	群管理の飼養管理方式が導入され、効率的かつ省力化が可能となる。	
平成 8 年度	朝地町ヘルパー組合の設立	削蹄等の相互扶助による共同作業化の確立	
平成 10 ~ 11 年度	自給飼料生産にロールベール体系が導入された。	自給飼料生産がより一層効率化され、規模拡大への機運が高まる。会員のうち 40 頭規模が 3 戸となった。	
平成 12 ~ 13 年度	新山村振興等農林漁業特別対策事業により平成 14 年度に農林水産物直売・食材供給施設を設置する計画が打ち出された。	温見地域畜産振興会員が中心となり協議会が設立され、会員地域振興策の策定され、都市との交流等による地域活性化に一致団結できた。	
平成 14 年度	運営方策について協議・検討。 里の駅やすらぎ交差点の施設を発注	大分県畜産共進会肉用牛の部において振興会員が農林水産大臣賞を受賞	
平成 15 年度 ~ 16 年度	里の駅やすらぎ交差点 6 月 6 日オープン。 やすらぎ交差点の経営方策について協議・検討を重ね、改善に取り組む。		15 ~ 16 年度は赤字が発生 改善努力が報われ、黒字に転じる
平成 17 年度	温見地域畜産振興会員から大分県農業賞農業企業者への応募	県知事賞を受賞。厳しい飼養管理条件における農業企業者の受賞者は県下の畜産農家への大きな励みとなった。	

5 活動の成果・評価

(1) 成果のまとめ

林間放牧による肉用牛生産産地の形成

シイタケ栽培の原木となるクヌギ林の下草刈りをさせるために林間放牧を積極的に取り入れたことが、限られた狭い土地条件の畜舎面積において多頭化を実現するとともに、飼養管理の省力化や飼料費の低減につながっている。総じて地域の肉用牛生産産地としての形成に貢献している。

また、林間放牧により健康で多産性に富み足腰の強い牛をそろえることができたこと、シイタケとの複合経営による省力化と所得向上が図られたことは評価が高い。

この結果、平成 18 年 2 月の肉用牛の飼養頭数は 875 頭（1 戸あたりの飼養頭数は 33.7 頭）で、平成 2 年と比較すると 1.5 倍（1 戸あたりの飼養頭数は 2.6 倍）となっている。

表 10 温見地域肉用牛飼養頭数の推移

（単位：戸、頭）

年 度	平成 2 年	平成 7 年	平成 12 年	平成 17 年
戸 数	45	42	31	26
農 家 平 均 年 齢	46.2	49.8	51.4	55.0
繁 殖 雌 牛	319	406	431	492
育 成	31	65	80	43
子 牛	224	246	290	337
肉 用 牛 頭 数 計	574	717	801	875
1 戸あたり飼養頭数	12.8	17.1	25.8	33.7
繁殖雌牛 40 頭規模 農家戸数	0	0	3	5

表 11 温見地域のモデル農家における飼養牛の飼料費コストの県内・全国比較

	A 農家	B 農家	大分県畜産協会調査データ 平均	先進指標	
	【当該地域】	【県草地利用 タイプ】	【県平均】	【全国平均】	
成雌牛飼養頭数	40.7	44.1	57.3	36.2	
成雌牛常時 1 頭当り年間所得	112,411	87,142	58,232	129,344	
成雌牛常時 1 頭当たり	売上高	283,113	279,983	301,035	
	売上原価	216,886	225,679	246,848	
	購入飼料費	77,948	104,749	80,993	
子牛出荷 1 頭当たり	生産原価 (家族労働費含む)	294,243	292,719	329,836	342,372

(2) 日本一の椎茸生産地に発展

通常のシイタケ経営においては原木の下草刈りは非常に労力がかかるものであるが、温見地域における肉用牛繁殖とシイタケの複合経営では、牛の放牧による舌刈りをさせることにより、労力低減につながっている。また、原木林が常に清掃された状態にあることから原木は害虫の寄生がなく、家畜糞の還元により発育も良い。

このため、シイタケ栽培に係る管理作業に時間を掛けられることから、品質の良いシイタケ生産が可能となっている。第54回全国乾椎茸品評会(平成18年度)では、大分県が史上初となる8年連続の団体優勝を果たしており、個人でも最優秀の農林水産大臣賞を5部門のうち3部門で受賞するなど輝かしい成績をあげている。

(3) 里の駅「やすらぎ交差点(産地直売所・産地加工品供給施設)」の設立による地域のさらなる活性化

温見地域の集いの場・拠り所とも言える朝地小学校が少子化等により平成15年4月に閉校の計画が打ち出された。「このままでは地域が衰退する」という不安や危機感が住民の間に起こったのをきっかけに、振興会を中心としたメンバーが立ち上がり、なんとかこの地域を活性化ができないかと座談会・研修会を重ね、その結果、地域住民が利用でき集うことのできる場として、温見小学校に替わる新たな地域づくりの拠点として、産直施設「里の駅」を企画・運営をしていくことになった。

まず、温見地域畜産振興会員を中心とした肉用牛農家と林研グループ、各自治会代表が構成員となる運営母体の「やすらぎ交差点協議会」が平成15年1月に設立された。この組織は住民の共存意識を喚起し、地域の発展、地域づくり組織としての役割も大いに期待された。

こうして、朝地町、県の指導を受けながら、「新山村振興等農林業特別対策事業」により、都市との交流や地域産品の直販、地域食材を活用した料理の提供による地域活性化をねらいとした地域の中核施設「里の駅やすらぎ交差点」が平成15年6月6日にオープンした。

販売物は、子牛から肥育まで一貫生産された純地元産の豊後朝地牛、全国椎茸品評会では上位を独占する椎茸、隣の綿田集落産の特別栽培米「綿田米」を主役とした地域産品を中心に、この食材三品が競演した加工品に「よくばりコロッケ」がある。特に、豊後朝地牛やコロッケは県外からも買いにくる盛況ぶりである。また、料理については豊後朝地牛や椎茸を活用した定食、うどん、そばを提供しており、昼食時は観光客の休憩場所となっている。

このような食材を提供する出荷者協議会では、販売用農産物の確保や高品質生産をするための研修会・検討会を重ねており、新たな農産物の生産活動が芽生えたり、農村女性や高齢者が生産活動に積極的に取り組むようになり、楽しみや生き甲斐にも一

役かっている。

里の駅やすらぎ交差点協議会では、地域の美化活動や環境作りのため、里の駅周辺や朝地小学校へのシャクナゲの植樹活動も行っており、住民全体が期待していた地域づくりの発信組織・交流拠点となっている。また、家畜市場開催後の通り道にもなることから、市場の反省会を兼ねた情報交換も行われる光景がしばしばあり、情報交換の場として機能している。

現在は順調になったが、オープンからの2年間は赤字経営のため、協議会メンバーも非常に苦しい経営を強いられた。しかしながら、各種イベントや直売部門の出荷者検討会、レストラン部門の新商品開発や接客研修会、経営コンサルによる経営研究、マスコミ等を利用した里の駅の県内外への紹介等の取り組みにより、平成17年度は黒字に転じ、来客数はオープンから現在まで10万人（レジカウント）を超えた。

さらに同地域は大分市への通勤圏内であるため、近年造成された20戸ほどの住宅団地があるが、こういったいわゆる新住民も「里の駅」の運営に出資しており、まさにこの取り組みが地域住民に理解され、指示された活動であることが証明できる。

表 12 里の駅 やすらぎ交差点協議会概要

・ 設立：平成 15 年 1 月
・ 構成：梨原、志屋、温見、小川野、鳥屋の 5 集落（144 戸）に係る温見地域畜産振興会、林研グループ、各地区自治会等より運営委員 27 名を選出。 うち 15 名は温見地域畜産振興会メンバー
・ 役員：会長 1 名、副会長 2 名、事務局長 1 名、会計 1 名、幹事 7 名以内、 監事 2 名、顧問若干名 ※ 会長、副会長、事務局長、会計、幹事 3 名の計 7 名は温見地域畜産振興会員である。
・ 代表：小野今朝則（温見地域畜産振興会員、椎茸生産者）
・ 里の駅やすらぎ交差点施設概要
場 所：豊後大野市朝地町大字梨小 1141 - 1
規 模：1 棟（147.1m ² ）
導 入 事 業：平成 14 年度新山村振興等農林漁業特別対策事業
オ ー プ ン：平成 15 年 6 月
施設費（設計委託料、事務費等含む）：55,999 千円
負担割合（国費 20,450 千円、県費 2,045 千円、町費 33,504 千円）
主な販売物：地域でとれた野菜、果樹、椎茸、加工品(コッパ、おにぎり、 漬け物等) 豊後朝地牛、綿田米
産地加工供給施設メニュー 地域産品を活用した定食、牛肉・椎茸うどん等

6 今後の課題

(1) 新たな後継者・担い手育成の推進

温見地域の肉用牛生産者 26 名の平均年齢は 55 歳である。他の地域より若い構成となっているが、大半は 40 代後半から 50 代半ばであり、20～30 代の生産者は 2 人である。

今後の畜産振興のためには、肉用牛経営の規模拡大による所得向上を図り、魅力ある肉用牛経営を後継者や地域の耕種農家に伝えていく取り組みが必要である。また、地域振興のためには農業後継者・担い手の確保が必要不可欠であり、若者が残るための農畜産業・地域づくりを目指し、市町村・農協等の関係機関、里の駅やすらぎ交差点等々と連携を取りながら、都市との交流や地域の中小学校を対象とした食育、シャクナゲ等の植栽による環境づくり等の各種イベントを通じて地域内外へ積極的に情報発信を行い、地域の魅力を継続して伝えていく必要があると考えている。

(2) 多頭化経営と地域振興運動の両立

里の駅やすらぎ交差点に携わる温見地域畜産振興会員、特に多頭経営者は自己の肉用牛経営と里の駅の運営、行事、消防活動等と非常に多忙な日々を送っている。

このような状況の中で、自己の肉用牛経営がおろそかに成りがちであり、これまで築き上げてきた肉用牛生産団地として確立してきたものを揺るがしかねない可能性もある。経営における省力化管理をさらに向上させるとともに、地域のあらたな後継者・担い手を育成して、地域振興の情熱を後生へ引き継ぐ機運づくりが必要である。また、経営から一線を退いた OB にも地域づくりの顧問として活躍の場を提供し、地域振興の輪を広げていきたいと考えている。

(3) 子牛市場成績の向上

温見地域の子牛市場成績は、豊後大野市の平均セリ価格より 10 千円程度低い成績となっている。原因は多頭化農家が繁殖雌牛群の改良を中心とした優良子牛保留が主体となっていること、肥育農家にアピールできる計画的な系統交配が確立されていないこと、出荷子牛にバラツキがあり、多頭化に対応した群の飼養管理技術の取り組み段階であること等が考えられている。

そのため、振興会では特に県マニュアルに基づいた衛生プログラムの遵守、県内外の種雄牛による繁殖雌牛群の改良、放牧牛の飼養管理の強化に力を入れて取り組んでいる。肉用牛生産団地として林間放牧を中心とした低コスト生産にとりくんでいるが、今後は子牛市場の評価の向上が必要不可欠であると考えており、若手農家が研修会等を通じて早期離乳技術や放牧牛の飼養管理技術、育種改良を図り、継続して実践・実証していくこととしている。

表 12 平成 17 年子牛市場成績

	温見地域	朝地町	豊後大野市
セリ頭数(頭)	402	663	2,121
出荷体重(kg)	269.4	270.9	272.4
セリ価格(千円)	419.5	416.2	429.7
日齢体重(kg/月)	0.95	0.95	0.96

豊後豊肥市場出荷分のデータのみ

7 当該事例の活動・成果の普及推進のポイント

(1) 普及にあたっての留意点

相互扶助精神をもった集団の育成

この温見地域の肉用牛農家は、お互いを思いやり、相互に扶助する精神が非常に強いことである。これは、厳しい中山間地域において労働生産性を向上させるため、昭和初期からの稲作や肉用牛生産、椎茸と共同作業により培われたことがこの地域性を生んだものと考えられる。その精神は後継者に脈々と受け継がれ、肉用牛生産においても重労働な削蹄、除角等の共同作業、共同牧野の活用、共同機械の利用による自給飼料の生産コストの低減に結びついている。また、一致団結して地域行事に取り組むことが地域振興や活性化にも大きく影響している。

地域リーダーの責任感と実行力

相互扶助の精神は地域リーダーを支える原動力となっている。温見地域畜産振興会の会員は単なる会員ではなく、リーダーと心をつなげて取り組んでいる。行事や事業の取り組みについては幾度も協議を重ねており、それだけにリーダーにはプレッシャーが大きく、常に責任感と実行力を求められる。

こうしたリーダーは自らの経営においても、規模拡大を進め、地域のモデル農家にもなっている。

低コスト生産の実践とたゆまない努力

リーダーを中心とした座談会は、低コスト生産、効率的生産への技術向上へ向けた交流の場となっている。飼養管理、自給飼料生産、受精卵移植等の新しい技術に取り組む際は必ず壁に突き当たっているが、地域が一体となったたゆまない努力、試行錯

誤により、農家自身の技術にしている。

特に肉用牛と椎茸の複合経営における低コスト生産への実践は、九州のみならず、全国的にも評価されている。

地域振興を基本とした地域住民、消費者との交流

一般的に、畜産農家と一般住民との混住化が進む中で、家畜糞尿等による臭い、ハエ等の害虫、家畜の鳴き声等で畜産は敬遠されているが、この地域の産業は畜産と椎茸が主体となっていることから地域住民の理解も深い。また、畜産農家を主体とした里の駅による都市との交流、地域住民を招待したイベントや地域小学校・中学校を対象とした食育事業を積極的に行っており、地域の賛同を得られている。

とくに、地域野菜や地域産品の活用による加工品の販売については、消費者の多方面からの意見、提案があるため、農業者にとっては非常に参考になることも多い。また、里の駅の商品のクレーム処理や運営においては農業経営とは違った経営観念を学ぶこととなり、これまでの農業経営からの脱却へとつながっている。

(2) 実施体制図

